**2016年4月28日 詩編を読もう：あなたがすべての民を導く平和 (詩編67)**

今週は詩編67編を読む。いつものように気になる言葉や節は何かを挙げる。次に、詩編の作者の気持ちになってどのようなことを詠っているか、よく考える。そして神はこの詩編箇所を通して私たちに何を語りかけているか思いを巡らせたい。

詩編 67編

1： 【指揮者によって。伴奏付き。賛歌。歌。】

2：神がわたしたちを憐れみ、祝福し／御顔の輝きを／わたしたちに向けてくだ

さいますように〔セラ

3：あなたの道をこの地が知り／御救いをすべての民が知るために。

4：神よ、すべての民が／あなたに感謝をささげますように。すべての民が、こ

ぞって／あなたに感謝をささげますように。

5：諸国の民が喜び祝い、喜び歌いますように／あなたがすべての民を公平に裁

き／この地において諸国の民を導かれることを。〔セラ

6：神よ、すべての民が／あなたに感謝をささげますように。すべての民が、こ

ぞって／あなたに感謝をささげますように。

7：大地は作物を実らせました。神、わたしたちの神が／わたしたちを祝福して

くださいますように。

8：神がわたしたちを祝福してくださいますように。地の果てに至るまで／すべ

てのものが神を畏れ敬いますように。

気になった節や言葉はどこだろう？　私の場合は、6回登場している、「すべて」とう言葉。

1節にまず説明があるが、指揮者も伴奏者もいるなかで、会衆一同が、主を賛美する歌を詠う、つまり、他の多くの詩編と同じく、ユダヤ教の礼拝で用いられることを目的として、この詩編が作られたように思う。　2節から8節全体を見ると4節と6節は全く同じ言葉になっている。　つまり4節と6節がペアになっている。とすれば、3節と7節がペアになっていて、また2節と8節がペアになっているような構成になっているように見える。すると、詩編作者がもっとも強調したいこととして、5節を頂点にしているように思われる。　「すべての諸国の民が、神なるあなたを喜び、祝い、歌いますように。　神が諸国の民を公平に裁き、この地で諸国の民を導かれますように。」そこには、諸国の民が、対立や戦い合うようなことはせずに、すべての民のために祝福しますように。また詩編全体として、作物を与え、御救いの業を示される神の思いにかなって導かれるように、すべての民が神を畏れ敬うようにという、神の平和が歌われているように思われる。

この詩編67編を通して、主なる神は現代の私たちに何を語っておられるのだろうか？　今週後半の聖書日課では、旧約聖書から箴言2章が与えられている。その5節には「あなたは主を畏れることを悟り、神を知ることに到達するであろう。」という言葉があった。箴言の大きなテーマは、1章の7節にある「主を畏れることは知恵の初め。」という言葉に現れており、2章5節も、そのテーマに関係している。　そして、詩編67編の最後まで読むと、8節の最後に「地の果てに至るまで／すべてのものが神を畏れ敬いますように。」とある。　67編の最後の言葉ではあるが、「すべてのものが神を畏れ敬う」という言葉に、知恵、それは、神を知ることであり、神を愛することの初めであることを示唆しているように思える。

私は世界に販売網を築いた東京に本社がある医療電子機器の会社に25年勤めたが、最後の2年半は、韓国、中国(3箇所)、南米、中近東への販売拠点設立企画と、その拠点の責任者たちとの調整役のようなことをしていた。会社を辞す数ヶ月前には、責任者たちにも牧師になるべく神学校の学びを始めている事情を話しはじめた。北京在住の中国市場の一責任者で、中国の歴史はもちろん、世界史にも詳しい方が、「安達さん、どんな時代になっても、宗教はなくなりませんよ。」と言われた。数十年にわたり共産主義社会により、宗教を弾圧してきたかのように見える中国に住む方が、そのように語られたことに、私は納得がいく気がした。　しかし、宗教という言葉は、とかく社会に分裂を起こしたり、排他的にしている、という悪評を得ているような面は否めない。　私はそういうことではないのだと思っている。この世の中が、どんな時代になっていようが、人間がどんな罪を犯し、間違いをおかそうが、神の祝福、憐れみ、赦し、愛が、常に注がれており、神を畏れ敬い、神を知ろうとし、愛し、賛美せざるを得なくなってしまう現実があるのだと思う。二千数百年前に、歌われはじめた、詩編67編が、そのように教えているようだ。アーメン

安達均